

歴史系博物館と建築資料に関する研究

—東京都内の建築関係資料収集・管理・展示・活用を中心に—

主査 早川典子*¹

委員 田中裕二*²

資料収集業務は博物館活動の根幹である。東京都内の歴史系博物館では、歴史学や、考古学、民俗学に関する資料の収集・展示はすでに盛んに行われている。この研究では、博物館における建築関係資料の現状を把握し、それを踏まえて地域の建築物に関する資料収集がさらに行われることを目指し、住宅、建築物に関する資料の収集方法や、資料管理、展示への活用などについて具体的な提案を行う。そして、東京都内の歴史系博物館に勤務する職員にとって、今後の建築関係資料の収集・管理・展示のための指針となるような取り扱い事例集をつくることを目指したものである。

キーワード : 1) 歴史系博物館, 2) 建築資料, 3) 展示, 4) 保存活用, 5) アーカイブ, 6) 建築家,

Architectural Materials in Museums of History.

-Collecting materials, maintenance, exhibitions, and utilization in museums of history in Tokyo -

Ch. Noriko Hayakawa

Mem. Yuji Tanaka

Collecting materials is the cornerstone of museum activities. The historical museums in Tokyo have actively collected and exhibited materials of historical, archaeological and ethnological studies. In this paper, I am examining the current conditions of architectural materials collected by these museums. On that basis, I am making practical proposals regarding how to collect materials of historic houses and architecture and how to organize and utilize them for exhibitions, which aim to activate the museums' collection of local architects. In addition, this paper intends to establish a complete collection of instructions about how to deal with the materials, which can be used as a guideline for staff members of the historical museums in Tokyo when they collect, organize, and exhibit architectural materials in the future.

第1章 はじめに

1-1 研究の背景

地域には郷土の歴史を展示する「歴史系博物館」「郷土資料館」が設立されている。博物館には「学芸員」という専門職員を置くことが定められている。博物館に勤務するための要件である「学芸員資格」の取得方法の関係から、博物館には、歴史学、考古学、民俗学を専門とする学芸員が圧倒的に多い。そして、博物館において収集している資料も、学芸員の専門分野に関するものが多く、展示室において展示の題材として取り上げられるものは、歴史学、考古学、民俗学などをテーマにしたものが多い。

地域の博物館では、住民から資料の寄贈を受けることが多い。寄贈を受ける資料では、生活民俗資料、古文書などのほか「古い家を壊すので見に来て欲しい」と言った情報も数多く寄せられる。民俗学の一部として、生活民俗的な視点からの住まい方調査や、生活民俗資料の収集活動は、長年にわたって行われてきた。このとき、

調査の対象となるのは、いわゆる「茅葺き屋根の古民家」であることが多く、近代の住宅や、いわゆる「近代建築」と呼ばれる建築物については、「専門職員がいない」「博物館の収集対象外と判断している」などの理由で行われないことが多く、博物館側の体制が整っていない。昨今の市民レベルにおける近代の建築物への関心の高まりに対して、現状では博物館の側がついていけないといえる。

歴史系博物館では、歴史学の分野を挙げれば、地域の地方(じかた)文書などは、「古文書目録」が多数作成され、資料目録に入れるべき内容など、作成フォーマットはある程度統一されており、研究者間でも一般化されているといえる。同じく民俗学や、考古学の分野においても同様である。資料収集業務は、博物館活動の根幹であるが、博物館において近代の住宅や、建築に関する資料を収集した際、資料名の付け方や、資料の分類、整理方法を含め、試行錯誤している状態である。

*¹ 東京都江戸東京博物館 学芸員

*² 東京都江戸東京博物館 学芸員

このような現状を踏まえ、今回は調査対象の範囲を「東京都」と限定し、「歴史系博物館」「郷土資料館」において、建築に関する資料が、どのくらい存在しているのか、そして建築に関する展示はどのくらい行われているのか、現状を把握し、歴史系博物館が抱える建築物資料についての問題点明らかにし、その現状を改善するための提案をすることを目的とする。

1-2 研究の方法

まず、東京都内の歴史系博物館、郷土館、資料館など、各自治体が地域の歴史資料を収集、展示するために設置している施設の現状を把握するためのアンケート調査を実施する。そしてアンケート結果をもとに、現地調査を行う。各種調査の結果から、歴史系博物館が抱えている問題点を整理し、この問題点を改善するための具体的な提案をすることを旨とする。

第2章 研究方法

2-1 研究対象の範囲

2005年（平成17）年度の文部科学省による社会教育調査の統計によると、この時点での日本の博物館総数は、博物館法上の博物館（登録博物館・博物館相当施設）で1196館、類似施設で4418館、合計で5614館となっている。このうち歴史系博物館として数えられているものは、博物館法上の登録博物館で405館、類似施設で2795館であり、合計で3200館となって、博物館全体の57%を占めている。

このうち今回の研究では、都内区市町村（東京都特別区23区・多摩地域30市・島嶼9町村）全62区市町村の自治体が設置している歴史をテーマとした博物館、郷土館、資料館を対象とする。東京都特別区23区にはすべて歴史系博物館がある。しかし、多摩地域は武蔵野市、三鷹市、昭島市、奥多摩町には歴史系の博物館がない。島嶼部では、御蔵島村、青ヶ島村、小笠原村は博物館がない。このため今回の調査対象施設は56施設とする。

2-2 建築資料の定義

この調査にあたり、何を建築資料とするかという用語の定義を行う。国立科学博物館等、関係施設の先行研究や、実際に博物館において収集可能な資料は何かを踏まえ、以下のように定義する。

- ①建築部材
- ②建設行為に使われる道具や機械
- ③建設行為のために作られた図面や文書類（図面・仕様書・竣工記録・スケッチなど）
- ④建設行為のために作られた模型
- ⑤建設行為にかかわる人に関する資料（大工・建築家など）
- ⑥建設行為を記録するさまざまな媒体（写真・動画など）

2-3 アンケート調査の実施

アンケート調査項目の策定については、各博物館が発行している出版物を予備調査から参考とするほか、江戸東京博物館における資料収集、資料管理等の業務の中から生じた問題点、他の歴史系博物館に勤務する学芸員からの聞き取りをもとに決定した。調査対象館と、その館の概要については[表 2-1]のとおりである。

第3章 調査結果と問題提起

3-1 東京都内の歴史系博物館の現状

都内の博物館施設 56 か所へのアンケート調査を実施し回答は 36 施設で、回答率は 65%であった。

東京都内の歴史系博物館の展示を概観していえることは、少なくとも 23 区内には、博物館の展示室内で語るべき地域のストーリーがしっかりあるということである。23 区以外の東京都域においては、現在の「東京」が「武蔵野」と呼ばれていたころの風景が、大都市近郊としてどのような経過を経て都市化、近代化したか、というテーマで語られることが多い。

アンケート結果の分析は以下の通り。

(1) 博物館・郷土館として建築物の保存・活用に向けての取り組み

自治体の場合は、社会教育課又は文化財保護課と博物館の間で、役割分担をしていることが多く、博物館活動として建築物の保存・活用に取り組んでいると答えた施設は約 30%であった。自治体としての文化財保護行政は、文化財を現地で保存する目的で尽力し、それが思わしくない場合に「博物館行き」となることが多いようである。

(2) 建築物の部材等の収集、調査の実施状況

建築関係の資料を収集しているか、との問いには約 60%の施設で収集していると回答。博物館にて日常的に行われる調査は、資料の収集が前提となっていると思われる。東京都内で見ると、区市町村内の建築物の悉皆調査を行っている自治体と、そうでない自治体では、情報量や、保存活用への関心度も差がある。

(3) 市民対象の地域の建築物の見学会等の実施

まちあるき、建築に限らない史跡等の見学会を実施しているという回答は 55%。博物館活動として行われている事例は多くないようである。

(4) 常設展示を充実させるために、あったらいいと思われる住宅や建築物

すでに茅葺き屋根の古民家を展示している施設は多数ある。このため大正から昭和初期の住宅がほしいという答えが最も多く、近代の暮らしの展示に関心が高いことがわかる。また戦後の集合住宅の展示をしたいという回答が、北区、渋谷区、豊島区から得られた。

[表2-1]調査対象館概要

自治体名	施設名	回答	展示内容	備考
○足立区	足立区立郷土博物館	あり	2009年3月にリニューアルオープン 戦後の都営住宅を再現展示	江戸東京の東郊という新しい展示テーマ 台所の展示が充実している
○荒川区	荒川ふるさと文化館	あり	1998年5月開館 1966年頃の住宅を再現展示	戦後の都市近郊の住宅
○板橋区	板橋区立郷土資料館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし 移築保存の古民家2棟併設	田中家住宅・新藤楼玄関
○江戸川区	江戸川区郷土資料室 一之江名主屋敷	あり	2008年8月1日リニューアルオープン 現地保存の事例として大変貴重	展示室には住宅の再現展示なし
○大田区	大田区立郷土博物館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし	
○葛飾区	葛飾区郷土と天文の博物館 葛飾区教育資料館		1991年に開館 昭和30年代の住宅と町工場の再現展示 大正14年に建てられた区立水元小学校 の校舎を移築復元して活用	2009年夏特別展『かつしか街歩きアーカイブス』 を開催 ボランティアの活躍
○北区	北区飛鳥山博物館 北区立ふるさと農家体験館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし 旧松澤家主屋及び倉庫	2003年秋企画展「団地ライフ」にて 区内の住宅公団の集合住宅の復元展示 ワークショップ盛ん ボランティア活躍
○江東区	江東区深川江戸資料館 (財団法人江東区地域振興会) 江東区立仙台堀川公園		1986年11月開館 江戸の町並みの一部が完全に再現 旧大石家住宅主屋	2009年7月1日より2010年7月末までリ ニューアルのため休館中 1996年、仙台堀川公園内ふれあいの森に 移築復元
○品川区	品川区品川歴史館	あり	1985年に開館 展示室には住宅等の再現展示なし	
○渋谷区	白根記念 渋谷区郷土博物館・文 学館 旧朝倉家住宅	あり	2005年7月にリニューアルオープン 重要文化財 一般観覧可能	建築物への意識が高い学芸員がおり、資 料収集、展示ともに充実している 同潤会代官山アパートの再現展示あり 1919年(大正8)竣工の和風住宅
○新宿区	新宿区新宿歴史博物館 (財団法人 新宿区生涯学習財 団) 林美美子記念館	あり	1988年に開館 江戸時代の商家・昭和初期の文化住宅 の再現 林美美子邸の転用	戦前から、東京市の外縁部にあたり、資料 もよく残り、区としての活動も盛んである 1941年の住宅
○杉並区	杉並区立郷土博物館 郷土博物館・分館 西田小学校郷土資料展示室	あり	展示室には住宅の再現展示なし 1997年開館 旧井口家長屋門、旧篠崎 家住宅主屋 小学校の敷地内にある施設	体験型展示施設
○墨田区	墨田区立すみだ郷土文化資料館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし	
○世田谷区	世田谷区立郷土資料館 岡本公園民家園 次大夫堀公園民家園	あり	展示室には住宅等の再現展示なし 旧長崎家住宅主屋、旧浦野家住宅土 蔵。旧横尾家住宅棟木門 旧安藤家住宅主屋及び内蔵、旧秋山 家住宅土蔵、消防小屋と火の見櫓、旧 加藤家住宅主屋、旧城田家住宅主屋、 旧谷岡家住宅表門	1980年12月に開園 1988年11月、展示室もあり、ボランティア 活動盛ん ワークショップも充実
○台東区	下町風俗資料館 付属展示場「吉田屋」 (財団法人台東区芸術文化財団)		大正時代の下町の街並みを再現 1910年(明治43)出桁造の商店建築	意識が高く、よく調査され、活用されている
○中央区	タイムドーム明石(中央区立郷土 天文館)		展示室には住宅等の再現展示なし	展示の中では近代の建築についての言及 はされている。
○千代田区	四番町歴史民俗資料館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし	博物館の歴史は古く、語るべきテーマが多 いの規模が小さいのは非常に残念
○豊島区	豊島区郷土資料館 雑司が谷旧宣教師館	あり	展示室には住宅等の再現展示なし 1907年(明治40)にアメリカ人宣教師の マッカーレブ居宅。区内に現存する最 古の近代木造洋風建築	
○中野区	山崎記念中野区立歴史民俗資料 館	あり	旧江古田村の実物の古民家(旧深野邸)を解 体し土間まわりを原寸大に復元	
○練馬区	練馬区郷土資料室 石神井公園ふるさと文化館	あり	現在は閉室した 2010年3月開館予定	茅葺き民家である旧内田家住宅の移築展 示が予定されている
○文京区	文京ふるさと歴史館	あり	1991年4月開館 常設展示には建築復元・再現展示なし 企画展の開催、資料収集、実績多数	企画展「文京・まち再発見」(1998年) 「近代建築の好奇心」(2005年)など多数 建築物への意識が高い学芸員がいる
○港区	港区立港郷土資料館	あり	再現展示なし 建築史専門の学芸員を採用	規模が小さいのは非常に残念であるが、 建築関係資料収集などの活動は盛ん
○目黒区	めぐろ歴史資料館 目黒区古民家[旧栗山家主屋]		2008年9月21日に開館 旧目黒区立第二中学校を改修して活用 茅葺き民家	旧石器時代の遺跡から始まり、現代に至る 通史展示

自治体名	施設名	回答	展示内容
○ 昭島市	歴史なし		
○ あきる野市	あきる野市五日市郷土館 旧市倉家住宅		「五日市憲法草案」のレプリカを展示 民俗や歴史の展示中心 江戸時代末期の古民家 養蚕技術の変遷がわかるなど地域の特徴あり
○ 稲城市	稲城市郷土資料館	あり	複合施設ふれんど平尾の2階。廃校となった学校を利用して、活用の好例
○ 青梅市	青梅市郷土博物館 旧宮崎家住宅	あり	釜の淵公園内にあり、好立地 1979年に移築された重要文化財
○ 奥多摩町	奥多摩水と緑のふれあい館		郷土資料の展示コーナーもある 民俗資料の展示中心
○ 清瀬市	清瀬市郷土博物館	あり	通史展示中心
○ 国立市	くにたち郷土文化館 国立市古民家	あり	1994年開館 通史展示中心 近代の郊外住宅開発についてのテーマ展示あり 1991年に城山公園の南側に移築された旧柳澤家
○ 小金井市	小金井市文化財センター		1930年に建てられた浴恩館の転用
○ 国分寺市	国分寺市文化財資料展示室	あり	武蔵国分寺跡出土の遺物が中心の展示室
○ 小平市	小平ふるさと村	あり	1993年開館 「旧神山家住宅主屋」「旧鈴木家住宅穀唄」「旧小川家住宅」「旧小平小川郵便局舎」「開拓当初の復元住居」「水車小屋」「消防小屋」「外便所」等
○ 狛江市	むいから民家園		2002年に移築 荒井家住宅主屋
○ 立川市	立川市歴史民俗資料館 川越道緑地古民家園	あり	1985年12月に開館 通史展示中心 甲武鉄道や立川飛行場についてのテーマもあり 1993年10月開園 入母屋造の古民家「嘉永五(1852)年」と書かれた部材が発見
○ 多摩市	パルテノン多摩歴史ミュージアム (財団法人 多摩市文化振興財 旧富澤家住宅 旧有山家・旧加藤家)		1987年10月に開館 通史展示 多摩ニュータウンについての詳細な展示 連光寺村の名主の家 公園内にある 江戸時代の古民家。同じ公園内にあり、市民の活動場所として貸出
○ 調布市	調布市郷土博物館 旧武者小路実篤邸		通史的な展示中心。太平洋戦争関係資料などの歴史資料 1955年に建てられた武者小路実篤邸を公開 武者小路実篤記念館に隣接
○ 西東京市	西東京市役所郷土資料室		廃校になった小学校を市の複合的な施設として転用
○ 八王子市	八王子市郷土資料館	あり	1967年4月開館 通史的な展示中心。また、こどもれきし展示室にて昭和のくらしや学校・遊びの様子などを展示。
○ 羽村市	羽村市郷土博物館 赤門 旧下田家住宅(重要文化財) 旧田中家長屋門	あり	多摩川を中心とする地域の歴史に密着した展示 水道の歴史など 中里介山の菩薩峠記念館の正門 1984年12月に博物館の敷地に移築 1982年3月に博物館の敷地に移築 もともと八王子千人同心の家の門だったものを移築
○ 東久留米市	東久留米市郷土資料室	あり	旧滝山小学校の4教室と廊下・倉庫を改修して転用。
○ 東村山市	東村山ふるさと歴史館 八国山たいけんの里	あり	1965年に開館 1984年かやぶき民家園が開園していたが、1999年に焼失 1999年に大正5年に建てられた洋風郵便局の部材を中心とした企画展を開催した 2009年5月にオープン 里山の歴史や暮らしを体験する施設
○ 東大和市	東大和市立郷土博物館	あり	狭山丘陵の成り立ちや雑木林との関わりなどについて展示 プラネタリウム併設
○ 日野市	日野市郷土資料館 日野市立新選組のふるさと歴史館 日野宿本陣		2005年4月から日野市教育センターの一角にて、地域の歴史資料を展示 「日野市ふるさと博物館」だった施設に展示コンセプトを変更して設置された、新選組がテーマの博物館 都内に現存する唯一の本陣 瓦葺の大屋根と、入母屋式台を持つ重厚な江戸時代末期の建築。新選組との関わりが深い、佐藤彦五郎の旧邸
○ 日の出町	小さな蔵の資料館		2004年に開館。美術資料中心。日の出町には江戸時代以降に造られた蔵が多数現存。
○ 檜原村	檜原村郷土資料館 旧小林家住宅	あり	1983年開館。通史展示中心。 重要文化財 江戸中期の古民家 2008年に購入し、管理
○ 府中市	府中市郷土の森博物館 (財団法人府中文化振興財団)		悉皆調査報告をもとに、1980年に基本計画策定。市内の公共建築物3棟(旧府中町立府中尋常高等小学校・旧府中町役場庁舎・旧府中郵便取扱所)、農家2棟(旧河内家住宅・旧越智家住宅)、町屋2棟(旧田中家住宅・旧島田家住宅)、旧三岡家長屋門を加え、建築物8棟を復元
○ 福生市	福生市郷土資料室	あり	通史的な展示中心。考古資料や、民俗資料、自然資料等
○ 町田市	町田市立博物館		1973年町田市郷土資料館として開館。その後、美術工芸品等の展示も含め、町田市立博物館と改称。常設展示がなく、企画展示を中心としていることが特徴。
○ 瑞穂町	瑞穂町郷土資料館	あり	図書館と併設している施設。郷土資料館(3階)には狭山、六道山、浅間谷遺跡から発掘された石器や土器が中心の展示。民具のいろいろばたを再現。
○ 三鷹市	歴史なし 山本有三記念館 (財団法人 三鷹市芸術文化振興財団)		大正15年頃に建てられた洋風住宅。1936年に作家山本有三が購入して住んでいた。戦後接收され、1956年に、東京都の所有となる。1985年から三鷹市に移管され、1996年11月から山本有三の文献や身辺資料と共に住居を公開する「山本有三記念館」として公開されている。建物は市指定文化財。
○ 武蔵野市	歴史なし		旧古瀬邸を改修した松露庵という茶室がある
○ 武蔵村山市	武蔵村山市立歴史民俗資料館	あり	里山の暮らしがわかる展示。地域の農家の一部屋を再現したコーナーあり。
[島嶼]			
○ 青ヶ島村	博物館なし		
○ 大島町	大島町郷土資料館		考古資料と民俗資料を中心に郷土の歴史を展示
○ 小笠原村	博物館なし		
○ 神津島村	神津島村郷土資料館	あり	明治39年6月に建てられた旧役場の建物を保存。
○ 新島村	新島村博物館		茅ぶき民家(コガ石の民家)に関する展示
○ 八丈町	八丈島歴史民俗資料館		通史的な展示中心。考古資料や、民俗資料等。流人文化を中心にした展示。
○ 御蔵島村	博物館なし		
○ 三宅村	三宅島郷土資料館		2008年4月に廃校となった阿古小学校校舎を改修して開館
○ 利島村	利島村郷土資料館	あり	展示テーマ「利島のくらし」

(5) 博物館・郷土館における資料収集状況

資料購入の予算があると回答している施設は全体の60%。寄贈資料の収集のみという回答は40%。収蔵庫などの物理要因や、人員・予算など様々な問題を抱えつつも、博物館として資料収集業務は継続されているようである。収蔵庫の中に入りきれない資料を屋外に置くなど、収集したあとの管理、活用については、各館とも工夫をしている。2000年（平成12）には、東京都現代美術館において、高額で購入した美術作品のうち、展示されたことがないのは問題である、という指摘が新聞にて報道された。³¹¹ この指摘を受け、江戸東京博物館においても「所蔵資料のうち一度も展示をしたことがない資料はどのくらいあるか」と問題視された経緯があり、そのような影響もあり、近年は展示に活用できる可能性がないものは、積極的に収集しない傾向があり、今回の回答においても「展示の可能性がないものは積極的に収集しない」との回答は半数を占めた。これは常設展示内に展示テーマがないものは、収集の可能性が低くなることが考えられ、問題点のひとつとして指摘しておく。そして資料収集は、学芸員の専門性に任されていると答えた施設も約半数あり、館の学芸員の興味関心は、その博物館の資料収集に大きな影響があることがわかる。

(6) 館に建築史の専門性を持った学芸員がいるか

この質問に対して、いるという回答があったのは、港区のみ。しかし学芸員資格を要しない、建築職の職員（非常勤職）が採用されているという回答を世田谷区の民家園から得ることができた。

3-2 東京都内の歴史系博物館がかかえる問題点

アンケート調査と、訪問調査をもとに東京都内の歴史系博物館を「展示」を中心に分類は、以下のとおり。

- ① 展示室内に住宅の一部や建物の復元（又は再現）をしている施設
- ② 博物館の敷地内に、地域の建物を移築保存している施設
- ③ 現地保存した建物を博物館や資料室として活用している施設
- ④ 常設された展示はないが、建築資料の収集活動を行い「企画展示」等で取り上げている施設
- ⑤ 建築資料に関する展示がない施設

以上のような分類をもとに問題点を挙げる。

1つ目は、区市町村の歴史系博物館、郷土資料館は、社会教育施設としての役割が大きいため、小学校の歴史教育との結びつきが強く、原始・古代から近現代までを俯瞰するような教科書的な通史展示の役割が求められていること。この場合、展示できる資料自体が限られていることから、自館では所蔵していない資料のレプリカを製作して展示するという現象が多数生じている。その結

果、どこの博物館でも似たような通史展示であるという批判がある。

しかしこの反省を受け、後発の博物館施設では、従来の枠にとらわれない試みがされることが多く、また既設の博物館の場合は、展示室のリニューアル事業に合わせ、各地域の歴史を展示する試みが行われている。

2つ目は、1つでも建築物の保存、活用の事例があると、予算、人員等の関係から、その後は、保存活動があまり行われなれないこと。他の分野に比べ、建築物の保存には、多額の費用がかかるため、行政の面から見れば、仕方がないことにも感じられる。

3つ目は、学芸員が配置されている施設においては、やはり古文書等を中心とする歴史学や考古学が専門の職員が多いこと。しかし、地域の住宅を中心とする建築資料への関心はないわけではなく、現場の調査はするものの、資料収集や展示室内での展示といった行為にはなかなか結びついていないことがわかる。

博物館の資料収集については、学芸員自身の興味関心に依る部分が多いことが明らかである。学芸員という職は、「博物館として後世になにを残すか」と判断する専門職であるので、自分の興味があるものを残す傾向が強い。従来型の学芸員が多い現状からすると、今後も同じような資料ばかりが増えていく可能性が高い。

3-3 解決方法の提案

歴史学や民俗学や考古学が専門の学芸員を採用するのと同じように、本来であれば、地域の歴史系博物館において、建築学を専門とする学芸員を継続的に配置していく方向になることが望ましい。しかし現在の行政の現状から考えれば、そう望むことは不可能に近いので、すでに学芸員として勤務している人に、少しでも建築資料の収集や展示について関心をもってもらい、活用方法を提案することが、現状を改善するためのベターな方法であるといえる。

必要性は感じつつも、具体的にどのような建築資料を残せばいいのか、あるいはどのように展示で活用できるのかがよくわからないという意見が多数あったため、建築資料の収集、管理、展示に関する取り組み事例集を作成することとする。日本国内には、すでに建築系の学芸員がいる博物館施設が十数施設あるので、その施設の事例を聞き取り、訪問調査を実施する。この中には、移築保存して展示している野外博物館施設を含む。

また、国内の事例だけでなく、海外の事例調査も実施する。建築資料の収集が進んでいるといわれるヨーロッパの事例を調査する。

第4章 建築資料の取組事例

4-1 国内の事例

(1)江戸東京博物館の事例

・資料収集方法

江戸東京博物館における資料収集の手段は「寄贈」「購入」「採集」「制作」の4つに分けられる。「寄贈」は、所蔵者の寄贈の意思を受け、東京都に寄贈してもらうこと。「購入」は、その年度の予算に応じて、市中の古書店や骨董商、個人から、資料を購入すること。「採集」は、学芸員自身が調査活動の中で発見した資料を博物館資料として登録すること。「制作」は、他館が所蔵している資料の複製資料を作成したり、現在は実在していないものを復元したり、映像資料として撮影することである。

江戸東京博物館には、都内外から年間200件以上の資料寄贈の依頼連絡を受けるが、すべてが収集に至るわけではない。様々な情報の中から、ときに博物館の中核資料となりうるような、貴重な資料の収集に至る場合もある。江戸東京博物館は、東京都が設置した歴史系博物館であるため、資料収集の対象は、時代では、近世初頭から、現代まで、地域では、おおむね現在の都域に関連する場所、種類としては、歴史資料、生活民俗資料、文化芸術に関する資料と大まかに定めている。

・博物館資料の分類

江戸東京博物館では「考古」「建造物」「絵画」「彫刻」「書跡」「工芸品」「生活民俗」「典籍」「文書類」「印刷物」「図書」「音響」「動画」「静止画」の様々な資料を収集している。資料の体系化のために「江戸東京博物館資料分類表」を定めており、おもに、建築部材を中心とする約400点の資料が「建造物」として分類されている。

博物館資料を管理するための資料収蔵庫は、素材別に分かれているため、資料保存の観点から建築資料として重要な「図面」は手書きであれば「文書類」、青焼き図面は「印刷物」に分類される。又「建造物」と「生活民俗」の境界を「造り付けであるか否か」と定めているので、建築に関連の深い資料であっても「生活民俗」に分類されている資料も多い。また土中から発掘された資料は、建物の破片であっても「考古」に分類される。これらは、実際に所蔵している資料の状況に合わせて分類しているので、歴史系博物館において、汎用性のある分類を目指したというよりは、江戸東京博物館においてすでに収集されている資料の分類として使いやすい分類を目指したものであるといえる。

・資料の管理

江戸東京博物館では、常設展示室とほぼ同じ面積の収蔵庫を備えており、以下に挙げる素材によって、部屋が分類されている。「美術収蔵庫」（絵画、版画など）「歴史収蔵庫」（書かれたもの、印刷物などの紙資料）「生活民俗収蔵庫」（木製品中心）「染色収蔵庫」（布

製品）「漆器収蔵庫」（漆器）「考古収蔵庫」（石、土、金属製品中心）「映像音響収蔵庫」（印画紙写真、動画フィルムなど）各素材に最適な温度、湿度に管理され、資料1点ごとにバーコードを付与し、コンピューターシステムによる管理がされている。

先に定義した建築資料の具体例では、①建築部材（鹿鳴館の持ち送りや、同潤会アパートメントのスクラッチタイルなど）②建設行為に使われる道具や機械（大工道具）③建設行為のために作られた図面や文書類（建築家土浦亀城の作品に関する図面類など）④建設行為のために作られた模型（猿江裏町共同住宅模型など）⑤建設行為にかかわる人に関する資料（東京帝国大学の総長を務めた建築家内田祥三に関する生活民俗資料）⑥建設行為を記録するさまざまな媒体（建築物の竣工写真や、都市の風景を記録したフィルムなど）

(2)江戸東京たてもの園の事例

江戸東京たてもの園は、江戸東京博物館の分館として都立小金井公園内に建設された。住宅を中心とする建築物を移築保存する野外博物館として計画されたものである。

・建築物の選定

江戸東京たてもの園が収集する建築物の範囲は、時代的には近世初頭から現代まで、地域的にはおおむね現在の都域に関連するものを中心と定めている。

この基準に沿って1988年（昭和63）から3回にわたって野外収蔵展示施設基本計画策定のための調査を実施し、「重要候補建造物」81棟を選定した。江戸東京たてもの園としての選定基準は「文化的価値のあるもの」という曖昧な表現しか定められていない。当時は、特に建築家による住宅だけを抽出することではなく、その当時、現存している住宅の中で、外観を見て保存状態の良いものが対象となっている。²²¹

・建築物完成までの流れ

ある建築物が現地に建っていた時から、江戸東京たてもの園の展示建築物となるまでにはどのような段階があるのだろうか。展示建築物「小出邸」を例にまとめる。

小出邸は、文京区に1925年（大正14）に建てられた建築家堀口捨己設計の住宅である。所有者宅では、子どもの結婚等で家族構成が変わり、2世帯住宅に建て替えたということになった。この建物は、先の重要候補建造物に挙げられており、持ち主が江戸東京たてもの園に直接連絡をした。東京都の諮問機関である野外収蔵委員会にて審議され、江戸東京たてもの園での収蔵が決定した。その後、所有者と東京都の間で寄贈書を取り交わす。所有者が引っ越しを済ませたあとに、解体工事に着手する。東京都は建物を解体し、更地にする工事までを引き受ける。解体工事の監理は、入札によって複数の業者から選定される。

解体調査によって建物の詳細な調査が行われている間に、居住者からの住まい方の調査が行われる。学芸員の仕事は、主にこの室内の再現展示の調査を充実させることだといえる。その後、園内での復元工事へと進む。居住者からの聞き取り調査と、建物の痕跡等を考慮しながら、復元年代を設定する。建物の復元年代と、内部の再現展示を合わせるのが基本であるが、増改築の多い建物や、所有者が変わっている建物の場合などは、建物の年代と、展示可能な内部の設定がずれることもある。

復元工事終了後に、家具調度品を入れ、庭などの植栽工事も完成した後、一般公開となる。一般公開後も、ただ室内を見せるだけでなく、解説のスタッフを配置したり、内部で音楽のコンサートを開催するなど、魅力ある展示とするためのアイデアを常に考え続ける作業が必要である。

・移築保存の限界

江戸東京たてもの園開園時点での展示建築物は 14 棟であるが、当初計画では、2001 年（平成 13）3 月末までに 35 棟の建築物を収蔵することになっていた。しかし 2000 年（平成 12）1 月には、財政難から江戸東京たてもの園の移築事業そのものを休止すると決定した。かかる金額が大きいゆえに、景気に左右される野外博物館という建築の保存方法には、限界があるといえる。また、自治体の特性として、首長が変わると予算編成も大きく変わるので、政治の影響を受けやすい。

先に述べた江戸東京たてもの園に移築可能な 23 区内の収蔵候補建造物調査は昭和 63 年度、平成 3 年度、平成 4 年度に実施され、この時点の住宅の悉皆調査として成果となっている。また東京都内の近代建築に関する悉皆調査は 1980 年（昭和 55）の『日本近代建築総覧』（技報堂出版）の調査があり、その後は東京都教育委員会による 1985 年（昭和 60）の近代和風建築調査報告、1991 年（平成 3）の近代洋風建築調査報告などがある。

23)

4-2 海外の事例

(1) ソウル特別市立歴史博物館

館長 Ph. D Hong-Bin KANG

2002 年 5 月に開館。慶熙宮という古宮跡に隣接。ソウル特別市が設立した歴史博物館。所蔵資料の約 70% 以上が市民の寄贈による寄贈資料。構想段階で博物館関係者が江戸東京博物館の視察に何度も訪れている。2009 年 5 月に元ソウル特別市副市長だった都市計画の実務家でもある Hong-Bin KANG 氏が就任。都市計画や都市構造についても強い関心を持つ。

・展示について

常設展示室のテーマは、ソウルの生活、文化、都市ソウルの発達。時系列順に大型都市模型を 5 つ展示。常設展示室内には、伝統的な朝鮮の家屋の模型や、瓦屋根の

構成を学べる体験型模型がある。実物の移築等ではないが、住宅の模型を展示することによって、ソウルの暮らしを紹介している。2010 年には、特別展示室にて、ソウルの都市計画の変遷を中心とした展覧会の開催準備を行っているとのこと。

・資料について

資料の大部分は、歴史資料（紙資料）、工芸、美術、生活民俗に関するものが多数。特に建築に特化した資料の収集は行っていない。公共建築の図面等については、ソウル市が公文書として保存しているとのこと。資料収集年代は、現在のところ、1945 年までという方針。

(2) ドイツ建築博物館 Deutsches Architekturmuseum

館長 Prof. D Ingeborg Flagge

1984 年に開館。19 世紀の建物を改装して建てられた博物館。フランクフルトの繁華街にあり、13 館もの博物館、美術館が隣接する一角にある。

・資料について

近代のドイツ建築に関する資料を中心に収集。180,000 点もの設計図や図面、600 点の建築模型、写真を中心とするコレクションを所蔵。例えば、アールデコ・表現派・アールヌーボー・モニュメンタリズム（古典様式）等。建築家では、カール・フリードリッヒ・シンケル、ミース・ファン・デル・ローエや、フランク・ゲーリー、建築家集団アーキグラムなど。建築物に関する銅版画、スケッチ、描画なども多数。

なお、バウハウスについては、ベルリンにバウハウスのアーカイブがあることや、ワイマール、デッサウに資料収集施設があるので、資料としては所蔵していない。

・展覧会テーマ

「モダニズムを見直す」「ポストモダニズムを考える」など。常設展は「太古の小屋から高層ビルまで」では、石器時代から現代までの建築物の 24 の大型模型を展示。

(3) スウェーデン建築博物館 Arkitekturmuseet

Ms. Torun Warne (Archival administrator)

1962 年から資料収集を開始。1978 年に開館。近隣には博物館、美術館施設が多数ある博物館区域の一角にある。コレクションは、1900 年代から現在まで。20 世紀以降の建築を、近代建築と定義し収集対象としている。

・資料について

代表的なコレクションは、スウェーデンを代表する建築家であるエリック・グンナール・アスプルンド（1885-1940）の全てのアーカイブを所有。

収集対象資料は、大きく分けて、図面・写真・模型・文書・モノ (Object) など幅広い。写真家が撮影した建築写真のコレクションもある。

資料の購入は前例がなく、すべて寄贈によるものである。当建築博物館に、資料が収蔵されることは、ステータスである。博物館内だけでなく、外部にも倉庫を持つ

ていて、コンピューターシステムで管理している。

モノの中で、一番大きいものは、公共の建物の中に入っていたグランドピアノや、建築物の表札など。アスブルンドのデスマスクも所蔵している

近代建築以前（1900年以前）の建築については、民俗学の分野であると考えており、別の施設で資料を収集している。また現代の建築についても、積極的に収集している。

(4) スカンセン野外博物館 Skansen

スカンセン館長 Mr. John Brattmyhr

1891年に開館した100年以上の歴史をもつ世界初の野外博物館。民俗学者であったハーツェリウスが近代以前のスウェーデンの生活の保存を国王に進言。王室の土地を一般に開放して創設された。近隣には多数の博物館、美術館がある。広い園内には、伝統的な商店や工房、農家、木造の教会、領主の邸宅など、スウェーデン各地から集められた住宅が並ぶ。また、スカンジナビア半島の動物が見られる特色ある動物園を併設。

・収集対象の建築物について

例えば、展示している教会の隣に牧師の家が欲しい場合、誰かが「自分の家は、牧師の家だから、移築しませんか？」という話を持ち込んで来たとしても、それが収蔵につながる、ということはない。どんな建物を収集するかというのは、とても重い責任があることであるし、お金もかかることである。

館内の職員で構成する収蔵の決定のための諮問機関があり、必要に応じて、外部の専門家を招集することもある。しかし、最終的な収蔵決定は館長である自分が下す。これらは、すべてわたしたち職員に課せられた重い責任である。政治的な影響などは、一切ないといえる。

・展示について

建物の中で働いている人が着ている洋服は、9万点あり、衣装庫の管理をしている人が10人くらい。建物の中の展示品は、約3万点あり、これは隣接する北方文化博物館にて管理されている。

建物の中での演出についていえば、例えば、1930年代の建物に、1940年代に見られたものの要素を付加することは、ありうることである。

建物のオリジナル（本物）とコピー（再現）については、全部で160棟ある園内の建物の中で、1930年代の生協（商店）だけが、新しい部材による再現である。これは1994年に、スカンセン内に建てられた新しい建物である。その他の建物はすべてオリジナルである。

スカンセンは「博物館」でなければならない。本物であることが重要で、ニセモノではだめである。

・来園者について

現在1年間で約140万人の入場者がある。わたしたちは、ファミリー層が子どもをたくさん連れて来てほしい

と考えている。調査によれば来館者のうち、外国人の75%は、建物を見に来ていると答え、スウェーデン人の多くは、動物を見に来ていると答えている。²⁴⁾

スウェーデンの人に、何度も足を運んでもらうためには、魅力あるイベントを開催するしかない。園内での催し物を考えるセクションの職員は、10人ほどである。

(5) ベニス国立公文書館

Mr. Giovanni Caniato (photo re production, bindery and restoration chief)

・資料収集について

イタリア各州の監査委員会が定められた基準に従い、すべての資料を行政的または歴史的な価値があり、かつベネト州の公文書館に収蔵すべき資料か否かを判断している。イタリアの法律に従い行政文書が行政的な価値を失い、公文書館に収蔵されるに至るまで、公文書の発行から最低40年の経過が必要である。ベネト州に係するすべての公文書はベニス国立公文書館に集められる。イタリア文化遺産省の地方官によって報告される私文書も収集対象となっている。イタリアの国立公文書館となる前は、ベネト州公文書館として、ナポレオン1世の時代に関係する文書を多数所蔵してきた。1817年から収集を開始。最初の収蔵資料に加えて、20世紀初頭からのベネト州文書が追加された。私文書に関しては、歴史的な価値があるものを寄贈または購入してきた。保存の観点から寄贈ではなく私文書の寄託も受けている。大部分の収蔵資料はベニス貴族階級の名家に関係した文書から構成されている。

・一次資料と二次資料について

我々は国立公文書館なので基本的に“コレクション”から独立して文書を集めている。一次資料と二次資料に関して言えることはサポート図書館を付設していることだ。この図書館は二次資料の保管庫と見なすことができ、特定の文書を探すための資料集めのために調査研究者へ開かれている。

・建築図面以外の建築資料について

文書として認識される土地調査書や地理模型は極めて少ない。また、建築物の装飾などは国立公文書館のコレクションとして考慮されていない。

(6) ベネチア建築大学デザイン学部アーカイブプログラム Ms. Teresita Scalco

・資料収集について

収集対象は、ドローイング（素描）、建築模型、建築写真など建築に係わるあらゆる分野の資料に及ぶ。アーカイブを訪れた調査研究者は所蔵する書簡、行政文書、研究論文、印刷媒体にアクセスできる。建築家自身がアーカイブとして集めた参考文献も閲覧することができる。これは建築家がどのような着想を得ていたかを知る手掛かりとなる。

このアーカイブは大学の一組織として 1987 年にスタートした。建築展示のギャラリーをもち、ベネチアの建築家を含む約 30 のアーカイブスを持っている。収蔵コレクションには建築写真家のアーカイブもある。学生の教育目的のための企画展を開催。デジタル資料についてどのように扱うかまだ収集方針が固まっていない。特徴としてベネチアビエンナーレの建築に関する資料や模型も所蔵。写真とドローイングのみをデジタル化の対象としている。建築家個人の手記も保存している。

収集対象年代は 19 世紀中頃から現在に至るベニス市とベネト州の都市と都市の変化を表すデザイン、コンペ資料など。個々のデザイン、建築コンペ資料、建設されたもの、建設されなかったが仮想の建築資料も収集。ベニス市とベネト州の建築家やエンジニアの専門アーカイブが充実している。ベニスの店やホテルを設計したマイナーな建築家のアーカイブもある。マイナーとは言え彼らもベニスの建築の歴史のひとつだから収集対象としている。

・建築図面以外の資料について

建築部材、レンガや外壁、ガラスなどについては、ベネチアの街自体が文化遺産なので、その中からどれか一つをアーカイブが所蔵する資料として選定することはできない。

・保存方法について

ドローイング、写真、紙媒体の資料は 18-24℃で保存。建築模型と一般の資料は別に保存。建築模型は高い温度で保存しても大丈夫。資料を収蔵するボックスは中性紙のボックスを使用。スケッチ類は中性紙にはさんで保存している。

(7)ベネチア建築大学図書館

Ms. Gloria Corregiari (head librarian IUAV' s central library)

Ms. Carla Pezzin (head librarian "G. Astengo" library)

・資料収集について

図書館という性格上、コレクション形成の基準として一番重視していることは信頼できる施設の利用者、特に教授や学術的な専門家による推薦にある。ベネチア建築大学の筆頭図書館として、学問の道を進むことになる学生にとって最も重要なベンチマークとなるため、コレクション・ポリシーは特に博士課程または修士課程の学生からの要求を考慮に入れている。収蔵のためイタリアで最もメジャーな出版社から送られてくる書誌と同様、大学に設置された様々な専攻から送られてくる参考文献にも目配りしている。本のコレクションに関して主な課題として挙げられるのは、十分な購入資金の獲得と収蔵スペースの確保である。すべての収蔵資料を確保することはできないので、時として図書館相互の貸借をしなければ

ならない。その一方、ベネチア建築大学は都市計画開発学科のコースを持ち、イタリア国内で数少ない求心的な建築大学図書館の一つとなるため、出来るだけその分野の収集に努めなければならないと考えている。

第 5 章 建築資料の取り扱い方法

ここでは、実際に、建築部材や、関連する図面や文書類について、歴史系博物館において収集すべき資料について具体的に整理する。

歴史系博物館の大きなテーマは、「地域の歴史、文化を展示すること」である。歴史系博物館の収集対象は広い。特に近代の建築史においては、建築家の作品としての建築物を中心に考えがちであるが、地域の一般的な住宅の両方を、収集対象として考えていくのが地域の歴史系博物館の大きな役割でもある。民俗学では、いわゆる茅葺き屋根の古民家については、調査事例が多く、実際保存事例も多い。しかし今後の収集対象は、それ以降の近代の住宅のうち、何を残すべきかという視点が重要である。

5-1 資料収集

○どんな建物が収集対象となるか

・地域の中でも、わかりやすい場所に立地している、ランドマークになりやすい建築物や、地域住民の愛着が湧きやすい住宅（例：しゃれた洋風住宅 下見板の張り方が特徴的、屋根瓦が洋瓦、風見鶏があるなど）

反対に、和風住宅の選定は難しい。住宅の竣工時から所有者が変わらず、聞き取り調査ができる、竣工当時から関連資料を所蔵しているなどの要素が判断の基準になる。

・商店や、集合住宅、公共性の高い建物

・先の『日本近代建築総覧』に掲載されている建物。ベンチマークになりやすい。

○どんな部材を採取したらよいか

・展示に使いやすい形状にあらかじめ加工して採取することが重要（例：一人で運べるもの、自立するもの、簡単な支持具があれば展示できるもの）

・外観や、意匠上の特徴となる部分

・現在はあまり住宅には使われない素材を採取

天然樹脂のエポナイト（電気スイッチなどに使用）

合成樹脂のベークライト（ドアのノブ等）

リノリウム（床材）

住宅の部材として使われた銀や銅、真鍮など

・技術の変遷がわかるものを残す

歪みのある板ガラス、プリズムガラス、型板ガラス、ステンドグラス

古い衛生陶器類、特に小便器、和式便器

シスターン（便器に流す水を溜める）

現在は、ディスプレイを専門とする展示会社によって、博物館においてさまざまな復元展示が行われているが、学芸員が復元の内容について正しく理解し、情報選択の主導権を持つことが重要である。建築を専門とする学芸員がいない中で、外部への委託によって行われ、博物館の内部には、復元に関する情報が蓄積されないという構造的な問題が多発している。再現展示は、展示手法として人気が高く、展示テーマを優先させるために、不十分な調査をもとに、それらしく製作され、なつかしさを漂わせた架空の再現展示が博物館に増えることは問題である。

○建築模型、コンピューターグラフィックス

どちらも博物館でよく行われている。特に建築模型は、「何を見せるための模型なのか」という優先順位を整理することによって、おのずと模型の縮尺が決まる。また模型やコンピューターグラフィックスが完成したあと展示室の中に置くだけではなく、手法の検討も重要である。

○建築図面

建築家書いた図面は、建築物の二次的な資料でありながら、本物の「資料」である。原図ではなく、青焼き図面などの複製した図面であっても、その中に含まれている情報量ははかりしれない。しかし、建築図面を見ることは、初心者には難しい部分もあるため、展示の際は、解説方法を工夫して、図面を見慣れない人に対しても、見どころやおもしろさ伝える努力が必要である。

○パース、スケッチ

現在は存在しない建物、プランだけで実在しなかった建築、あるいは、ある建物の別プランなどを含め、その建物のイメージや詳細を伝えることのできる展示資料である。

○建築写真

撮影者のフィルターを通して、ある時代のある建築について多くの人に伝えることができる資料である。

○建物の部材や破片

その部材が建物の中にあった状態と同じ位置で展示できるような支持具が必要である。また、写真やパースなどと組み合わせて展示することにより、イメージし易くする工夫も重要である。

○家具調度品類、生活用具

歴史系博物館では、生活民俗資料の収集は積極的に行われており、収集しやすい資料である。「歴史系博物館における建築展示」という視点で考えると、その資料が使われていた建築の写真や図面と組み合わせて見せることによって建築的な展示になる。

○建設行為のために用いる道具や設備

民俗学における研究成果を活用しつつ、やはり建築の写真や図面と組み合わせて見せることによって建築的な展示になる。

○建築の展覧会と入館者数

江戸東京博物館において、2001年（平成13）に初めての建築展として開催された特別展「東京建築展」（会期47日）の入館者数は、37,245人であった。また同じく東京都内で開催された建築の展覧会では、2005年（平成17）東京ステーションギャラリーでの「前川國男建築展」（会期58日）では約34,000人であった。^{注5）}この数が多いか少ないかを判断することは、それぞれの施設に委ねられるが、参考までに江戸東京博物館らしい歴史系の展覧会である2008年（平成20）の特別展「天璋院篤姫展」（会期42日）の入館者数は159,842人であり、建築の展覧会に足を運ぶ来館者数は、いわゆる日本の歴史好きな層に比べると少ない。

その他、博物館における資料の利用は、展示だけでなく、資料目録の整備や、所蔵資料の画像データの公開、研究者への実物資料の閲覧の便宜、他施設への資料貸し出しなど、活発に行われることが望まれる。

第6章 まとめ

6-1 類似施設との比較

(1) 文書館の場合

日本には、国立・都道府県立の公文書館があり、主に近現代の行政文書を保管するための施設である。東京都の公文書は、東京都公文書館（東京都港区湾岸）にて保存されている。建築資料としては1873年（明治5）の銀座煉瓦街の工事に関する資料や、関東大震災後の都市計画についての資料が中心の内田祥三文庫が著名である。公文書館は集客施設ではないので、来館者数や利用者数によって施設の存続が議論されることがないが、反対に潤沢な予算が計上されることもない。

博物館は集客施設であり、展示を通して多くの入場者を獲得しなくてはならない。入場者数が増えれば収入も増える。良質な資料の収集活動は、博物館の集客力アップにもつながる。

日本における建築家の資料は、現在のところ建築家の出身大学に収められる事例がある。（東京藝術大学の吉村順三資料など）また（社）日本建築学会には、建築博物館が設立され、アーカイブスとしては伊東忠太、曾根中條設計事務所、山田守、清家清、宮脇檀などがある。

※参考文献あり。

(2) 文学館の場合

地域の歴史系博物館における「建築家資料の収集」については、特定の地域だけで多くの作品を残している建築家であればともかく日本各地に作品を残している建築家の膨大な資料を、ひとつの歴史系博物館が一括で収集対象とするのは難しいと考えられる。実際、博物館が必

要なものだけを選んで収集するケースがあり、原資料の散逸を防ぐ観点からは望ましくない。しかしこのような場合の資料収集については「文学館」をイメージすると考えやすい。現在、北海道、青森県、埼玉県、神奈川県、山梨県、石川県、鹿児島県などが文学館を持っている。文学館では、例えばある作家が幼少期を過ごした土地で、その作家の全資料を所蔵したり、あるいは晩年を過ごした場所で、作家の死去をきっかけにその地元の文学館に原稿等が寄贈される。このようにその文学者の「地域性」「時代性」を基にしつつ、一括資料収集が行われている。建築家についても同じように一括収集が当たり前になっていくことを期待する。

また公立私立、規模を問わず個人の文学者の文学館・記念館は日本国内に多数存在する。この中ではその文学者の書斎が復元され、その文学者の書棚には、読んでいた本が並んでいる。筆者は、江戸東京たてもの園において前川國男の自邸の復元を担当したが、前川設計事務所の方から前川の蔵書や、前川が好んで聴いていたレコードを見せていただいた。そしてそれらは、建築作品と密接な関係があることは明らかで、前川國男邸の公開に合わせて行った小規模な展覧会で、それらを展示した経験がある。建築家についても、文学者のように、記念館が建てられたら、どんなに素晴らしいことか。

文学者としての評価が高く、建築作品もあった立原道造²⁾は、東京都文京区に立原道造記念館がある。

6-2 最後に

本研究では、博物館に不可欠な専門職員として学芸員に向けてさまざまな提案を行ったが、学芸員は万能ではない。しかし学芸員は、博物館の中でそれなりの「権力」を持っていることは間違いない。しかし学芸員に限らず、建築的な知識や技術を身につけている「建築学」を専攻した職員が博物館の世界に増えることにより、施設の安全管理や、展覧会の施工図面を書けるなど、メリットが多い。現在、博物館は「展示会社」と密接な関係にあって、展覧会のための施工図面や、費用の積算などすべて「委託」によって外注されている。

また、建築物の保存において「器としての建物を残すこと」にばかり議論が先行し、その中で営まれる生活という視点が抜け落ちてしまう場合がある。その点、博物館を利用すれば、建物と、生活の双方を保存することが可能になると、期待される。今後も、「博物館における建築の保存」というテーマで、次代に歴史や文化を継承するための研究を継続したい。

<注>

- 1)2000年(平成12)2月4日毎日新聞朝刊など
- 2)北海道札幌市にある北海道開拓の村は、道内をブロック分け

し、ブロック内の郷土史家などに協力を要請し地域住民が協力して数年かけて道内の古い建築物を調査したという経緯がある。

- 3)世田谷区、中央区、北区、大田区、板橋区、台東区、文京区、港区では調査報告書が作成されている
- 4)ストックホルム市内の動物園はスカンセンのみ
- 5)財団法人東日本鉄道文化財団ホームページより
- 6)立原道造(1914-1939)立原道造記念館は1997年(平成9)開館

<参考文献>

- 1)久保田稔男：博物館における土木・建築資料とその情報整理について、標本資料データベースの標準化に関する調査研究報告書、国立科学博物館、1997
 - 2)久保田稔男 宇治田裕子：歴史的建築資料整理のための目録化の試み 『村松コレクション』(その1)、国立科学博物館研究報告、Vol. 22, p1~p38, 国立科学博物館、1999. 12
 - 3)真鍋恒博他：建築部品・構法の変遷に関する資料の保存とリスト化に関する研究、住総研研究年報、Vol. 26, 1999. 3
 - 4)国立科学博物館編：産業技術史資料の評価・保存・公開等に関する調査研究、国立科学博物館、2000
 - 5)国立公文書館編、国立公文書館所蔵資料保存対策マニュアル、2002. 3
 - 6)国際アーカイブス評議会建築記録部会編、安澤秀一訳：建築記録アーカイブス入門、美学出版、2006
 - 7)日本建築学会建築アーカイブ小委員会編：日本における建築アーカイブの構築に向けて、日本建築学会、2007
 - 8)日本建築学会編、特集「建築資料をのこすということ」、建築雑誌、Vol. 123, 2008. 5
- ・酒井一光：大阪市交通局旧庁舎の建築部材について、大阪歴史博物館研究紀要第7号、p97-p110、大阪歴史博物館、2008. 10
- ・酒井一光、大阪歴史博物館編：大阪歴史博物館館蔵資料集5 建築家中村順平、大阪歴史博物館、2009
- ・大阪市立住まいのミュージアム編：住まいのかたち 暮らしのならい 大阪市立住まいのミュージアム図録、平凡社、2001

<研究協力者>

- | | |
|--------|-------------------------------|
| 新谷 昭夫 | 大阪市立住まいのミュージアム副館長 |
| 酒井 一光 | 大阪歴史博物館 学芸員 |
| 菊地 勝広 | 横須賀市立自然・人文博物館 学芸員 |
| 川口 明代 | 文京区教育委員会 文京ふるさと歴史館 学芸員 |
| 山口 隆太郎 | 北区教育委員会文化財係 学芸員 |
| 高橋 深雪 | 前 世田谷区教育委員会次大夫堀公園民家園 文化財資料調査員 |
| 渋谷 卓男 | 川崎市立日本民家園 学芸員 |
| 植村 昌子 | 竹中大工道具館 研究員 |
| 志岐 祐一 | 株式会社日東設計事務所 |